

気象学会の大会運営と気象集誌論文の数に思う

近藤 純正*

筆者は4年前に表題に関心をいただき、次の主旨のものを資料と共に40名の方々に配り、それらからの意見をまとめた事がある。その主旨は「気象学会の大会講演数は最近急に伸びはじめたが、気象集誌論文数は米国の論文などに比較して、それほど伸びていない。この原因が、もしわれわれの研究態度にあるならば、改めなければならない……」であった。

三寺光雄氏の(天気1976年5月号)「大会運営のあり方について気象研究所の18名の意見」を最近拝見した。この事から筆者も、先に集めてあった意見を披露し、更に私見を述べたくなった。4年前は特に境界層分野の講演数などを中心にしたが、今回は気象学全体の資料に整理し直した。

1. 4年前の意見のまとめ

境界層関係の講演数が非常に多くなってきたのに、論文数はそれほど増えていない。それはなぜか？(当時の資料は省略)に対して寄せられた意見の筋は以下のとおり。

(A)講演数が増えたのは良い事である。これはいろいろの面でその必要性が認識され、研究者も増えたことによる。しかし発表したものは論文にまとめる努力が必要。

(B)これは境界層関係だけの問題でない。研究者は他の事にいそがしすぎる。

(C)論文数が少ないのは気象学全分野である。講演だけしておれば、何となく成果を上げているような気持になるが、これではいけない。論文にまとめるべきである。大会運営は講演を full paper と短時間で報告する preliminary report の2つに分けたらどうか。

(D)現在の公務員制度であるかぎり、研究はおとろえる。

(E)学問には波があるから心配ない。しかし部厚い調査報告書を作っていると、論文を書く時間的余裕がない。

(F)アメリカ人は、10分ぐらいの講演時間で研究内容を話すことが難かしくなってきた。その代り、論文書きに力を入れる。したがってアメリカでは論文数対講演数の比が大きい。気象学全般に、やれる問題は大体解決されたようだし、次の段階への新しい飛躍が必要である。

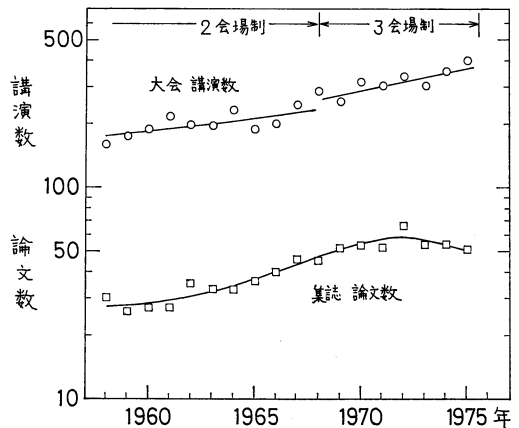
(G)気象集誌以外の雑誌も増えたから、集誌論文数の低下は気にならない。講演数を多くして知識の交換をはかるのは良い事である。

(H)論文数と講演数の比が日本は16%、アメリカは68%にはおどろかされた。日本の研究態度が甘いのではないか。

(I)研究者は他の分野の勉強もすること。設備が十分でない所の人には、論文になりやすい問題を取扱うようにする。等々……。

2. 気象集誌論文数

気象集誌の論文の数と質は日本における学会活動の1つのバロメータと思う。第1図に1958年からの論文数の変化を示した。数を対数目盛であらわしたので、グラフの勾配が増加率(成長率)の大きさになる。日本経済の高度成長期に時をほぼ同じくして、1960年代後半が論文数の高度成長期であったが、その後、安定期(?)に入ったようである。



第1図

* J. Kondo, 東北大学理学部地球物理学教室

これに対して、春秋の大会講演数の最近の成長率はめざましく、1968年以前の約2倍の速度になった。ところで、1976年から講演申込方法が変わったので、今後それが成長率にどう影響するのであろうか？

3. 私見

これは自分自身の反省のつもりで述べてみたい。

(a)研究態度

気象学会の活動が盛んであると云う事は、講演数だけが多い事だとは思わない。なぜなら、口で話した事は消えて無くなる(?)からである。講演数と同時に論文の質・量が増加しなければならない。講演は形が出来上がっているように見えても、多くの場合、中途半端なものが多い。それを書いていけばよく分るように、完成までの半分の段階である。従って講演発表のみに目的を置かず、論文を仕上げる事に重点を置くよう、心がけるべきである。そうでなくて、講演発表の申込み期日になってからテーマを決定し、ちょこっとやる態度では論文は完成しない。

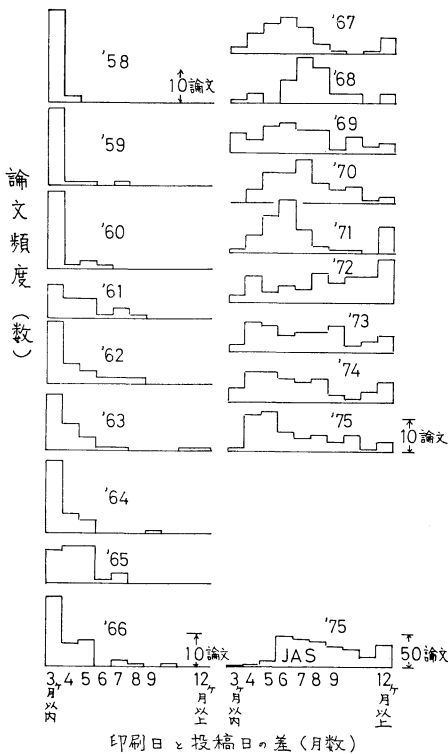
(b)学会誌

今後は気象集誌の出版(別刷も含む)が余計におくれ

ないこと。第2図は集誌への論文投稿日と印刷発行日との時間差(月数)の頻度分布を年代順に示すものである。筆者が編集委員を担当した経験からすると、このタイムラグは気象集誌では6ヶ月以内なら正常であると思う。例えば、12月に投稿すれば、1月中旬にレフェリーにまわり、コメントが付いて再び著者に返ってくる。改稿が必要なら、3月末までには修正できるだろう。その後、担当委員に送り、検討され、4月中旬に編集委員会で受理、印刷所へまわる。それで6月号に印刷される。改稿不要または僅かの訂正なら、更に2ヶ月は短縮される。これ以上のタイムラグは例外を除けば、次の2つに原因がある。(i)レフェリーか担当委員が長期間放っておく場合。この件は過去にあったと聞かすが、このような事があると投稿意欲が失なわれ、論文数は減る——編集委員は責任を持って今後共対処してほしい。(ii)最近の講演会は発表時間が少なく、討論もろくにされない事も原因し、推考不足の原稿が投稿される。したがって、その後の改稿で時間がかかる。但し、論文を良くする為に時間をかけるのは良いが、レフェリーの好みに合わぬからと云って、過度の改稿は不要である。しかし指摘された点は、著者の気持として、論文が悪くならない範囲でなら、直した方がよい。

1972年ごろからは上記(i)によるものは年々改善され、1975年の頻度分布は良好である。これは編集委員長の努力によるところが大きいのと思う。しかし、(ii)に対しては、ますます大会の環境は悪化している。論文の仕上げに際しては現在の大会でなされる討論だけで(投稿規定にはそうなっているが)十分討論された事にならない。それ故、大会の討論だけに頼らず、自分のまわりの者と、自分自身による推考を十分重ねてから投稿すべきである。投稿前に討論をしないで、投稿してから1年近くも1~2のレビューと些細な事を郵便で討論するのはお互いに時間の損失である。印刷までのタイムラグが大きくなると論文の価値も減る。元来、論文は完成稿を投稿すべきであるのに、中には、投稿してから討論を受け、原稿を書き直そうと、最初から考えている者もいると云うことを聞く。

なお、参考のために、アメリカのJAS(1975年)のタイムラグ頻度分布を第2図の右下に示した。アメリカでのおくれは、印刷そのものの時間が、日本より2~3ヶ月余計にかかる事によるようである。以上は名目上、雑誌の表紙記載の印刷月についてであるが、実際に読者が受け取るまでの時間差が気象集誌では、まだ大きい



第2図

で、この点の改善を今後望みたい。ちなみに、筆者が1975年分の集誌を受け取った実際のおくれは、平均48日（最小16～最大74日）に対し、船便による JAS では平均36日（23～50日）であった。

(C)講演会

講演企画委員会が毎回要望するように、予稿集には研究の方法と得られた結果を書く。そうすれば大会出席者が討論内容を前もって準備できる。特に最近の如く講演時間が短くなると尚更である。したがって講演会だけのための、間に合わせの報告は次回にまわすべきである。

講演会場を現在より多くするのはよくない。以前のよりに2会場制がよい。講演会では、いろいろの専門分野の人々が最近の情報を交換し合い、現時点における気象学全体の進行方向を雰囲気として捉むと同時に、他専門の人とも討論し、お互いの学問水準を高め、新分野を開拓して行く事に意義がある。専門のちがう者同志であるから、理解できるまでには時間がかかるので、講演時間

は15分、討論時間も15分程度がよい。そのためには全体の講演数を減らさざるを得ない。前述したように、皆が論文を仕上げる事に重点を置くよう、方向転換すれば上の事は実現可能ではなからうか。（筆者の主張は講演をやめると云うのではなくて、講演だけで終るのは良くないと云う事である。）

また講演会はここで云う堅い意味の目的もあるが、一方、年に1～2回、同好者が集まり話をする親睦的な意義も大切であるから、気やすく報告できる部分があってもよい。それでC氏の提案にあったように講演を2つに分け、一例として、午前中は full paper、午後はその他の講演と云う事も考えられる。また、その際に、大会は東京で年に1回だけ開き、更に数個の分科会を合併した地区大会を年に1回だけ行なう方式もある。

大会を意義あるものにするために、これまで講演企画委員会が実行してきた、いくつかの試みを支持し、更に今後も改革が推進される事を望みたい。

(498ページのつづき)

サブ・プログラムについては、先づ先の JOC で山越え気候 (Air Flow over and around Mountains) が正式に GARP のサブ・プログラムのひとつとして認められました。先信でも書いたように、field experiment (FGGE の後に実施) としてはアルプス地方を選んではいますが、問題意識としては大規模山岳系の影響や室内実験も考慮に入れて、このサブ・プログラムの計画をすすめていくように JOC は勧告しています。モンスーン関係では西アフリカ・モンスーン研究実験計画 (WAMEX) が JOC によって認められ、よりしっかりした計画案をつくることになりました。パネルでは更に実施にむけて、第1回 WAMEX 計画会議を11月末に開くことが決められました。一方 MONEX の方は、計画案がほぼまとまり、77年2～3月に予定している第3回計画会議

で具体案を決める予定です。1977年にソ連とインドが中心になって実施する“Monsoon-77”実験は、予定通り行なわれることになり、5月下旬スリランカ（セイロン）のコロンボで計画会議が開かれ具体的観測案が決められました。ソ連からの4～5隻の観測船とインドの2隻の観測船が中心で、ポリゴンを形成しながらアラビア海とベンガル湾を移動したり定着したりしながら観測しようというものです。POLEX の方も5月にモントリオールで計画会議を開き、FGGE 期間中の観測実施が決められましたが、FGGE に寄与していく形ですすめていくように JOC は要請しています。更に、POLEX のデータは、気候力学の研究との関連でも利用していく必要性が強調されています。では又。